

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (43) 士師記(10)ギブアの戦いとベニヤミン族

エフライムの山地に神殿を持つ一人のレビ人がいました。彼はベツレヘム出身の側女がいましたが、彼女は夫が嫌で、父の家に逃げ戻っていたのです。レビ人は彼女を迎えに行きました。側女はよほど一緒に行くのが嫌だったのか、何日もレビ人を家に留めるように父に引き止めさせたようです。

けれども彼は側女を連れて帰ることになりました。ベニヤミン族の住むギブアに着いた時、日が暮れました。一人の老人が声をかけてくれました。レビ人は「エフライム山地の奥にある私の郷里の主の神殿に帰る途中である」と話すと、老人は同族だったためか、親切に家に泊めてくれました。



側女 James Tissot(1836-1902)

その夜、町のならず者が老人の家を囲み、レビ人を出せと迫りました。この老人は自分の娘、また、客人の側女を差し出すから、レビ人には非道なことをしないでほしいと言ったのに、彼らは言うことを聞きませんでした。レビ人は自分の側女をつかんで、外に押し出しました。するとならず者たちは彼女をレイプし、一晩中弄びました。彼女は明け方やっと家の入口まで辿りつきましたが、そこで倒れてしまいました。

翌朝になってレビ人は出発しようとした時、側女を戸口で見つけましたが、返事がないので、そのまま口バに乗せ、郷里に戻りました。家についてから、彼は彼女の体を刃物で12の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつけました。このレビ人はあまりに残酷、残忍で、異常と感じざるをえません。

レビ人の送りつけた切断された遺体を見て、全イスラエルが震撼させられました。ミツパに集まり、これへの説明をレビ人に求めました。彼は「ならず者」を「ギブアの首長」とし、「男色」の求めを「殺人」と言い換え、「側女を押し出した」ことは言わず、「辱めた」と訴えたのです。他に証人はいませんでした。全員はベニヤミン族の集団レイプの歪行を糾弾することに決めました。この背景には、レビ人は神に仕える、聖別された人であり、また、嗣業の土地を持たないため、全員で支えるべき人であることが基本にあります。また、女は性奴隷になっても何の問題もない、そのための道具のような存在であったこと、また、男色は非常に忌むべきことという3点があるのでしょうか。彼らはベニヤミン族へ犯行者を引き渡すように言いましたが、ベニヤミン族は聞こうとはしませんでした。

とうとうイスラエルの部族は結束し、ベニヤミン族に対する制裁の戦闘がギブアで始まりました。2万6千人に対して40万人の圧倒的な軍勢でしたが、ベニヤミン族の武力は侮れないほどでした。また、同胞同士が戦うことは耐え難い悲しみでした。激戦の末、結果はでました。

全イスラエルのえり抜きの兵士一万人がギブアに向かって進撃し、激戦となった。ベニヤミンの人々は自分たちに不幸な結末が訪れるとは思ってもみなかった。主はイスラエルの目の前でベニヤミンを撃たれたので、イスラエルの人々が、その日打ち滅ぼしたベニヤミンの兵は二万五千百人に上った。彼らは皆、剣を携える者であった。ベニヤミンの人々は敗北を認めざるをえなかった。(士20:34-36)



シロの娘を妻とする John Everett Millais

ベニヤミン族は皆殺しにあい、絶滅の危機を迎えました。イスラエルがミツパの祭壇で共に祈った時、この戦闘に出てこなかったギレアドの部族がいたことが判明し、その部族にも制裁を加え、彼らの娘たちをベニヤミン族の残りの者に与えることで和解を図りました。それでも人員が足りずに、契約の箱が置かれていたシロの町で、祭りの時に娘を見つけ、妻にすることも許しました。武闘に優れ、左利きの人が多いと言われているベニヤミン族は最少の部族となりましたが、生き延びていきました。おぞましい話で士師記が終わっています。